

高田遺跡群

第1次発掘調査報告

前原町文化財調査報告書

第23集

1986

前原町教育委員会

高田遺跡群

第1次発掘調査報告

前原町文化財調査報告書

第23集

1986

前原町教育委員会

はじめに

私達の住む前原町は、古代より、北部九州における大陸文化の門戸として、我が国の歴史を学ぶうえで、数々の重要な足跡を残して栄えた地域であります。古くは江戸時代天明年間、青柳種信の『柳園古器略考』によって著名な三雲南小路遺跡、井原鎌溝遺跡などの弥生時代の王墓をはじめ、大陸の埋葬方式をとり入れた墓地の先駆的発掘調査となった志登支石墓群、吉備真備が中心となって築いたとされる奈良時代の大宰府北の防衛線怡土城など、周知の遺跡はいうまでもなく、現在でも町内には数多くの大切な文化財が眠っています。

高田地区も、その例にもれず、今回の発掘調査によって当地にも約2,400年前には人々が確実に生を営んでいたことが判明し、また、糸島平野における古代低地利用史の扉を開いたということで、非常に意義のある調査となったようです。本書が、当地域の学術研究の一助となれば幸いです。

発掘調査を行うにあたりましては、各方面から御指導、御協力をいただきました。とくに高田行政連絡区からは、作業員として発掘に参加していただき、また周辺住民の方々の暖い御理解、御協力をいただきました。そして、調査の最中に、通学区となっている波多江小学校6年生児童が、社会科実習として遺跡見学に足を運んでいただきました。関係各位の御理解、御助力に厚くお礼申し上げます。

今後とも、文化財保護活動に格別の御配慮、御協力をたまたわりますようよろしくお願ひします。

昭和61年3月31日

前原町教育委員会

教育長 河原吉美

例 言

1. 本書は糸島郡前原町大字高田215-4番地の共同住宅建設の施行に先立ち、前原町教育委員会が昭和60年4月に行った埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 今回の調査を高田遺跡群第1次調査とする。
3. 今回の調査地点をその小字名から「高田チク遺跡」とする。
4. 本書に用いた地図は国土地理院発行の5万分の1地形図『前原』および前原町都市計画課保管の2,500分の1地形図をもとに製作した。
5. 遺構実測、および遺構写真は 岡部裕俊、林 覚があたり、遺物実測、写真撮影には前二者に川村博が加わり、分担して行った。
6. 製図は岡部によるものである。
7. 本書に示した土器実測図の薄手のアミかけ部は丹塗り範囲を示し、濃いめのアミかけ部は有機炭化物の付着範囲を示す。
8. 木器実測図のアミかけ部は焼痕残存範囲を示し、図内矢印は工具による加工方向をあらわしており、断面図に描かれた同心円あるいは曲線は、製品の木取りを表すために年輪の廻り方を模式化して示したものである。
9. 製図は岡部によるものである。
10. 本書の執筆、編集は岡部が行った。

本文目次

I	調査にいたる経過	頁
	1. 調査にいたる経過	1
	2. 発掘調査の組織	1
II	遺跡の立地と概要	3
III	調査内容	
	1. 調査地点の立地と層位	5
	2. 遺構各説	5
	(1) 溝	5
	(2) 土壇	8
	(3) 自然河道	9
	(4) その他の遺構	13
	(5) 包含層出土遺物	13
	3. まとめ	18

挿図目次

第1図	遺跡の立地と周辺の地理的環境 (1/50,000)	2
第2図	糸島低地帯周辺の地質図 (1/100,000)	3
第3図	調査地点周辺地形 (1/5,000)	4
第4図	調査区西壁セクション図 (1/50)	6
第5図	溝2出土土器実測図 (1/3)	7
第6図	自然河道中央セクション図 (1/50)	9
第7図	自然河道出土土器実測図 (1/3)	10
第8図	自然河道出土木製品実測図 (1/6)	12
第9図	第Ⅱ層出土土器実測図 (1/3)	13
第10図	第Ⅳ層出土土器実測図 (1/3)	15
第11図	第Ⅵ層出土土器実測図 (1/3)	17

図 版 目 次

- 図版 1 a. 調査地点全景 (南から)
b. 自然河道近景 (南から)
- 図版 2 a. 調査地点基本層位
b. S D 01 溝層位 (東から)
- 図版 3 a. S D 02 溝層位 (北から)
b. S D 02 溝土器出土状況
- 図版 4 a. 自然河道土器出土状況
b. 同 木製品出土状況
- 図版 5 遺物写真①
- 図版 6 遺物写真②

I 調査にいたる経過

1 調査にいたる経過

高田遺跡群の位置する糸島平野は、古代より、歴史的に重要な地点として歴史学者諸氏の注目を集めてきた地域であり、現在にいたるまで多くの大切な文化遺産を残していることは周知のことで、古くは中国の歴史書『魏志倭人伝』の文中に登場する古代集落国家伊都国の比定地として、多くの考古学ファンが訪れる観光名所も多い。緑豊かな田園都市である。

この純農村地帯であった前原町も、昭和40年代後半から、福岡都市圏に隣接するベッドタウンとして人口が急増しはじめ、昭和58年の筑肥線と福岡市営地下鉄の相互乗り入れによってその傾向に迫車がかかり、現在にいたっている。その中でも高田地区は福岡市西区と境界を接するという地理的要因も相重なって、町内でも最もはやく、急激に農地の宅地化がすすんだ地域である。

今回の調査対象となったチク地区は、昭和59年11月に建築申請者より提出された、賃貸共同住宅新築に伴う造成工事に先立つ埋蔵文化財発掘届にもとづき、文化庁、福岡県教育委員会の指導のもと試掘調査を行ったところ、埋蔵文化財の包蔵が確認されたため、前三者に町教育委員会を交えての入念な協議、連絡を経て、翌4月5日から26日にかけて、約3週間にわたる発掘調査を実施し、記録保存措置をとるにいたった。

発掘調査に際しては、土地所有者であり申請者である吉永幸男氏をはじめ、工事施行にあられた株式会社高松組の各位には、並々ならぬ御理解、御強力をいただき、調査を迅速、円滑にすすめることができた。末尾ながら、記して感謝の意を表する。

2 発掘調査の組織

当発掘調査に伴う組織の構成は以下のとおりである。

調査主体	前原町教育委員会		
調査担当	前原町教育委員会社会教育課文化係		
総 括	教育長	河原 吉美	
	社会教育課課長	野口 治三	
	同 文化係長	吉村 耕治	
庶 務	同 社会教育係長	徳重 認	
	同 主事	久保 静代	
調 査	同 文化係主事	川村 博・林 覚・岡部 裕俊	
調査補助員		石井扶美子	

- | | | | |
|-----------|-----------|-------------|-----------|
| 1 高田遺跡群 | 6 向原遺跡群 | 11 三雲・井原遺跡群 | 16 若八幡古墳 |
| 2 治遺跡群 | 7 福原遺跡群 | 12 怡土城址 | 17 有原1号古墳 |
| 3 志登遺跡群 | 8 高・多久遺跡群 | 13 御道具山古墳 | 18 井原1号古墳 |
| 4 志登・洞遺跡群 | 9 波多江氏館遺跡 | 14 泊大塚古墳 | 19 古祖1号古墳 |
| 5 浦志遺跡群 | 10 曾根遺跡群 | 15 丸隈山古墳 | 20 古墳 |



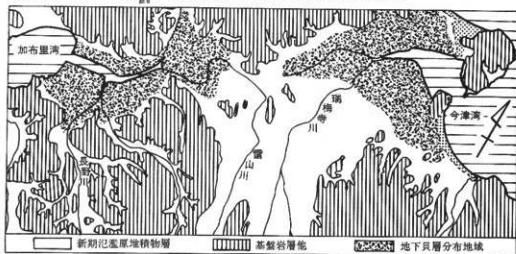
第1図 遺跡の立地と周辺の地理的環境 (1/50,000)

II 遺跡の立地と概要

雷山、井原山系に源を発する雷山川、瑞梅寺川等の長期間にわたる堆積作用によって形成された糸島平野は、その河川流域の沖積地を現標高5m前後から山系にむけての緩斜面状をなす糸島扇状地と、5m未満の加布里湾と今津湾を結ぶ帯状の湿地帯である糸島低地帯とに大別することができる。糸島低地帯の形成については、下山正一氏等による研究報告がなされているが、その報告によれば、従来言われていた言わゆる糸島水道の存否の問題に関して、ハンドオーガー試験調査等による地下貝化石層の分布の分析調査で、水道の最狭部と推定されていた泊地区の地下からは貝化石層が検出できなかったこと(第2図)などから、その存在の可能性について疑問視する見解がなされていることは注目に値する。

高田遺跡群は、糸島扇状地の末端部、瑞梅寺川の東岸に位置する。当遺跡から川をさかのぼること約2kmは、古代伊都国の中心であったとされる三雲・井原遺跡群があり、その西側に残る中位段丘上には、弥生時代から古墳時代にかけての当地の代々の首長墓を配す曾根遺跡群、また川の東側には標高416mの高祖山がそびえ、ここには奈良時代中期頃の朝鮮式山城である怡土城が築かれている。また糸島低地帯に目を移せば低地帯を南から北に派生する舌状の低位丘陵上に多くの遺跡群が分布しており、高田遺跡群の西北西1.5kmには支登支石墓群を含む旧石器～中世の集落遺跡である石登遺跡群、そのさらに西側1kmには弥生終末の小銅鐸が出土した浦志遺跡群を配す。その北には御道具山古墳等、前期古墳を含む志摩半島の陸の玄関口を見下ろす代々の首長墓が残されており、今後これら重要遺跡の詳細な調査、報告が待たれる。

当該遺跡群はその東南東約500mに、縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての集落遺跡の一部とされる千里シビナ遺跡とその母体をひとつにする遺跡群と考えられる。



第2図 糸島低地帯周辺地質図(1/100,000)
(下山、佐藤、野井研究報告 1986図より簡易化して掲載)



第3図 調査地点周辺地形 (1/5,000)

Ⅲ 調査内容

1 調査地点の立地・層位(第4図・図版2-a)

調査地点の周辺は、現在でこそ簡静な新興住宅街であるが、以前は、その大半が豊饒な水田地帯であった。調査地点も例外ではなく、コンボによる表土剥ぎを開始すると、まず宅地造成に伴う地上げの為に運び込まれたバイラン土の盛土が約30cmの深さまで続いた後、つい最近まで耕作されていた水田が2区画分検出された。(第1層)その下層には酸化鉄の沈殿層、(床土・第Ⅱ層)を挟んで、中・近世の水田址と思われる粘質土層が2層(淡黒褐色粘質土・第Ⅲ層、黒褐色粘質土・第Ⅳ層)があらわれた。第Ⅲ層上面には数条の暗渠溝状の灰褐色土層が南北に連なって検出されたが、遺物等は発見されなかった。第Ⅳ層からは手掘りや掘り下げたが、同層からは、中・近世までの遺物が混在して包含されていた。第Ⅲ層と第Ⅳ層との境は凹凸が激しく不整合な堆積状況を示すが、第Ⅴ層(灰黒色粘質土)は第Ⅳ層に比べてレベリックな堆積を示していた。第Ⅴ層は弥生時代前期の包含層となっており、同層が同期の水田址の可能性も有していたが、畦畔等の付属施設は検出されず、また堆積層も薄いため、後世の削平等によって既に上面が削られたことも考えられ、遺構として確認するにはいたらなかった。第Ⅴ層を注意深く掘り下げていくと、弥生前期の遺構面に到達した。

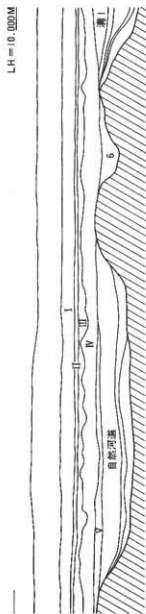
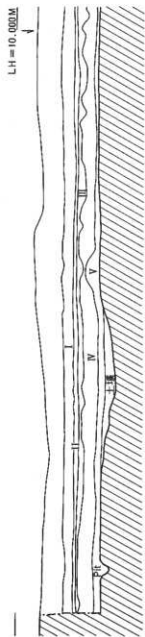
調査地点は瑞梅寺川によって形成された沖積微高地で、弥生前期の遺構面は周辺地域を含め、太古より当該河川の氾濫原として幾度とない浸食、堆積作用を繰り返してきたようであり、複雑な土壌の堆積状況を示している。弥生時代の遺構面も礫層と青灰色シルト層の互層となっている。礫層は2層に分層され、上層は細砂を多く含む泥砂礫層であり、弥生前期遺物を多量に包含する二次堆積層ともなっていて、青灰色シルトも下層礫層の上に堆積しており、基盤層は下層礫層となる。

今回の調査では時間的制約から、礫層の詳細な検討は断念せざるをえなかった。今後、その形成過程に関する考察等は、将来にわたる課題として残されることとなった。

2 遺構各説

(1) 溝(図版2-b, 3-a)

溝1は、北西端で検出した南西から北東に流れるもので、幅150cm、深さ50cm弱、断面逆台形状を呈す。溝の西側は青色シルト基盤層、東側は自然河道の流路変更による、二次堆積した黒色粘質土から掘り込まれている。溝堆積土は黒灰色粘質土で、底には粗砂の堆積がみられた。黒褐色粘質土からは弥生前期壺片等、小土器片が数片出土している。



LH = 10,000M



- 1 暗黒褐色粘質土
- 2 黒褐色粘土
- 3 暗灰褐色粘土
- 4 黒色粘土
- 5 灰黒色粘土
- 6 暗灰褐色粘土(溝?)

- I 暗黒褐色粘質土(耕作土)
- II 明黄褐色粘質土(床土)
- III 淡黄褐色粘質土
- IV 黒褐色粘質土
- V 灰黒色粘質土

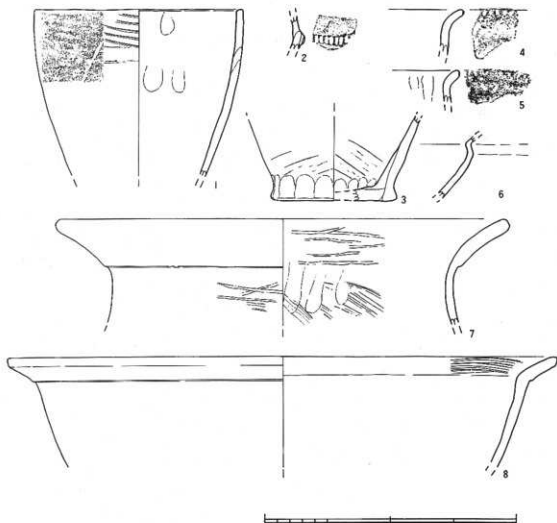


第4図 調査区西壁セクション図(1/50)

溝2は、調査区東側で検出した。南北に連なる浅い溝で幅250cm、深さ20cm。断面は外開きのU字形で混砂礫層を掘り込んで形成されているため水利施設とし機能していたか否かは判断に苦しむが、当報告では一応、溝遺構として報告しておく。堆積土は粗砂を含む粘質砂層であった。下層より縄文晩期から弥生前期にかけての土器片が出土したが、いずれも激しいローリングを受けており、二次堆積遺物であることを窺わせる。そのため、残存状態は良好とはいえない。

溝2出土遺物 (第5図・図版5)

1～3、6は、縄文晩期土器、他は弥生前期土器である。1～3は深鉢、6は浅鉢片である。1は口縁部から胴部にかけての3分の1ほどが残存する。復元口径16.4cm、やや内傾した断面



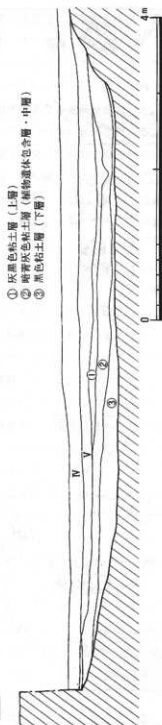
第5図 溝2出土土器実測図(1/3)

「コ」字形の口唇部から、若干内湾ぎみに底部にいたる小形の深鉢である。突帯、刻み目は施されていない。外面は磨耗が著しいが、口縁部下3cm程まで左斜め上方への貝殻調整痕が残り、内面はナデ、押圧調整が行なわれている。口縁下はヨコ方向、胴部はタテ方向のナデ痕跡が残る。胎土は石英、角閃石粒を多く含みやや粗め、暗茶褐色を呈し、焼成は良いがやや軟質である。2は屈曲部突帯片である。破損面から明瞭な接合痕が観察された。内面には板擦痕が残る。長石、角閃石粒を含むが、胎土自体の質は精良である。色調は淡褐色で焼成は良い。3は底部片で復元底径10.0cm、底端部は指押成形により外方へ鋭く突出し、押圧による凹みを経て胴部に向けて上外方へ直線的に伸びる。内外面とも斜め上方への板擦痕がみられる。破損部の断面観察によると、胴部を円筒状に成形した後に底部に粘土を充填したことが窺われる。胎土は粗めで白色小砂粒を多く含んでいる。色調は灰色みを帯びた淡茶褐色である。焼成はやや軟質である。6は小片であるため口径の復元ははばかれる。土器の傾きも正確とは言えない。胴部はやや深めで若干丸みを帯び口縁に向けて鋭くS字状に屈曲している。器表は磨減が著しいため調整の詳細は明らかではない。胎土は白色小砂粒を多く含み、淡茶褐色を呈し、焼成は良い。

4、5は甕口縁片、7は壺、8は浅鉢片である。4、5はいずれも、口唇部に刻み目をもついわゆる如意状口縁の形態を示す。胴部はいずれも直線的に底部に向かってすぼまっており4は5に比べ口縁の外反がなだらかで肉薄である。胎土は粗い角閃石粒を含む粘土を用いており、暗茶褐色をなし焼成は良い。5は口唇部がやや肉厚で「く」字状に外反する。内面には指押圧痕がみられ、外面には煤が付着している。白色小砂粒を含んだ粒土が使用されており焼成は軟質である。器表は暗茶褐色を呈す。7は大形壺の口縁片である。口径は復元すると36cm程になる。きつくしまった薄めの頸部から大きく外反する肥厚した口縁部が残存する。頸部と口縁部の稜は明瞭で鋭い段がみられ、口唇部は丸みをもっておさめている。口縁外面はヨコナデ、内面にはヘラ研磨調整が施され、頸外面には所々にヨコヘラ研磨調整がみられる。頸内面は、左斜め上方への粗いハケ調整が施されている。胎土には、白色小砂粒が多く含まれ、色調は暗茶褐色、焼成は軟質の出来である。8は大形の浅鉢口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径は42.8cm、肥厚して大きく「く」字状に外方へ屈曲する口縁部を特徴とする。口唇部は尖りぎみに成形されており口縁部と胴部の境には明瞭な段がみられる。器面の最終調整はナデ調整であるが、口縁内面には粗いヨコハケ調整が施されており、また外面には薄く黒斑が残される。胎土は石英、雲母、角閃石粒を多く含む良質の粘土を用いており、焼成は良好で器表は淡桃灰色である。

(2) 土 墳

自然河道北東岸で検出した主軸を東西に持つ、長径134、短径100cmの平面楕円形の土墳で、自然河道が流路を変えて埋没した後にⅣ層上面より掘り込まれていた。深さ40cmで、底部まで掘り進むと、壁面、および底から、豊富な水が湧き出てきた。遺物等の出土はなかったが、Ⅳ層から



第6図 自然河道中央層位図 (1/50)

掘り込まれていることを考えれば、掘削された時期は弥生前期にまで遡るものと思われる。井戸的な機能を有するものかもしれない。

(3) 自然河道

自然河道は、調査区西半部を南東から北西に向けて流れ、中央部で大きく西に蛇行する。川幅が5m～7.3mの小河川で、遺構面からの深さは、最深部で70cm弱を計る。流路は本来北側へまっすぐに伸びていたものと思われる、調査区北西端に旧河道と考えられる幅8m程の黒色粘質土と粗砂の互層が基盤青灰色シルト層の上にレンズ状に堆積していることが確認された。

河道の堆積土は、大きく3層に分かれ、小砂粒を多く含む灰黒色粘土層（上層）、植物遺体包含層である暗青灰色粘土（中層）、黒色粘土層（下層）に分けられた。遺物を包含していたのは上層、および下層であり、また大きめの土器片が東岸側に集中して出土していたことは、生活空間を河道の東岸以東に想定するひとつの証査になる。出土土器は縄文晩期土器と弥生前期土器であるが、その主体は板付Ⅱ式土器である。縄文晩期土器は細片ばかりであり、かつ激しいローリングを受けたものばかりであるため、河道が流路として機能していたのは弥生前期後半期と推定される。

自然河道出土土器 (第7図・図版5)

1～4は上層、5～9は下層、10～15は最下層から出土したものである。

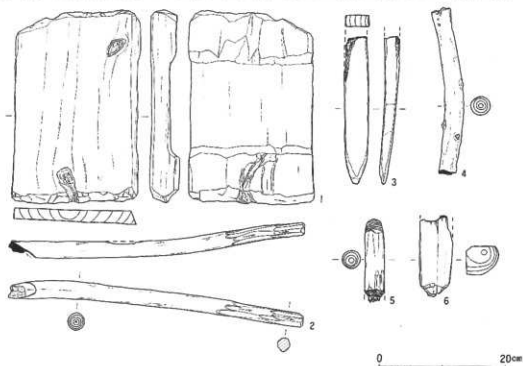
まず上層から出土した土器から順に述べると、1、2は中形甕口縁部で、口径を復元すると16.5cm、やや外側にふくらむ胴部は口縁下で若干寸ばまった後、口縁は再び外側に広がる。口唇部は断面「コ」字形に成形された後、外縁に刻み目が施されている。胴部は内外面ともにナデ押圧調整が行なわれているが、口縁内にはヨコハケ調整がなされている。外面は、横方向の板擦痕が残る。

にヘラ状工具による横方向の平行沈線がみられ、その間にはヨコ研磨が施されている。胎土は良質の粘土を用いており、色調は淡黒褐色、焼成は良好堅緻である。13は口縁片で復元口径20.2cm、口縁は肥厚し、頸部との境には明瞭な段を有す。口唇部にはヨコナデがみられ、口唇部下には若干のタテハケ痕が残っているが、他は内外面ともヨコ研磨を施している。白色砂粒、石英粒を多く含む粘土を用い、色調は黒褐色で焼成も良い。15は中形壺の底部片である。底部は若干の上げ底で、底部から胴部にかけてなだらかに弯曲しながら進なり大きく外に張り出しており、調整は内外面とも細いヨコ、斜めへのヘラ研磨が行なわれている。胎土は長石・角閃石を含む精良な粘土を胎土としており、黒褐色の硬い焼きの仕上がりとなっている。

木製品

木製品はいずれも、自然河道下層より出土している。材質により残存状態に若干の差異はみられるもの、おおむね良好な状態といえるが、機能、用途、時期について、断定できうる資料は発見できなかった。樹種の正式な鑑定は行っていないため今後の検討材料としたい。

1は全長30.4cm、幅19.7cm、最大厚4.7cm、厚さ4.5cm程の樹芯を含んだ征目取りの板材の両端を表裏面から穿って折りとった板材である。切断部両端にはともに粗い石斧によると思われる刃線痕が鮮明にみられる。裏面には中心に長さ15cm程の抉りが施されており、主軸断面は「コ」字形になりやや表面側へ反っている。住居の主柱底部に使われた礎板とも考えられるが詳細は明ら



第8図 自然河道下層出土木製品実測図 (1/6)

かにし難い。針葉樹材である。2は全長47.1cmで、径2.5~2.8cm程の細めの丸木棒材の一方を斜めにそぎ落とし、細みの他方を先端から14cmにわたって周囲を削り端部に面取りを施したものである。斜めにそぎ落とした端面には焼痕が認められる。3は現存長23.5cm、幅4.0cm、最大厚2.4cm、カンズの征目取り材である。板は若干の反りをもち、残存する一端は剣先状に削りこんでおり、磨耗が著しい。農耕具の刃部かもしれない。4は径3.0cm程の丸木材の一端に焼痕を残すもので、表面には樹皮を残している。製品の一部であるかどうか明らかではない。広葉樹材である。5は現存長13.3cm、径3.2cmで、丸木の周縁部を削った後に研かれているため、所々に削った痕跡とみられる薄い稜がみられる。端部は丸く磨耗しているが、研磨加工によるものか何らかの使用に伴う磨滅であるかは断定できない。残存状態が良く堅質である。針葉樹材であろうか。6は残長12.3cm。丸木を4分割した状態の断面形態を示し、端部には周囲から削り込んで折りこった痕跡が認められた。樹皮は剥ぎ取られていた。針葉樹材と思われる。

(4) その他の遺構

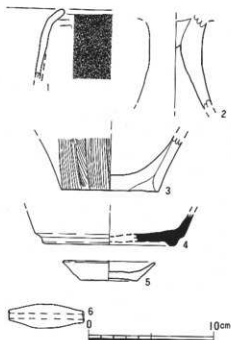
自然河道西岸に柱穴が3個検出され、調査区西側に排水溝を掘った際にも、壁面にかけて1個検出した。深さは10cm~15cm前後と浅いもので、埋土中からは土器は発見されなかったため時期の断定はしかねるが、自然河道が完全埋没した前後の時期であることが、西壁排水溝に切られた柱穴のセクション図によって窺われる。

(5) 包含層出土遺物

第Ⅲ層出土遺物 (第9図・図版6)

1~3は弥生土器、4は須恵器、5は土師皿、6は有孔土錘である。

1は甕口縁片で直線的に伸びる胴部から如意状に外反する口縁部が残る。内外面ともヨコナデ調整。胎土は砂粒の少い精選された粘土を用い、色は灰白色で外面には煤が付着する。焼成はやや軟質であるが良好である。2は高杯脚部で、器厚はやや厚く脚部部に向かってなだらかに開くようである。内面には杯中心部からの粘土充填によって粘土塊の垂下が認められた。器面調整は器表の磨滅が著しいためよくわからない。胎土には白色砂粒を含んだ割合に精選された粘土が用いられている。色は淡黄灰色で、焼成は良い。3は甕底部



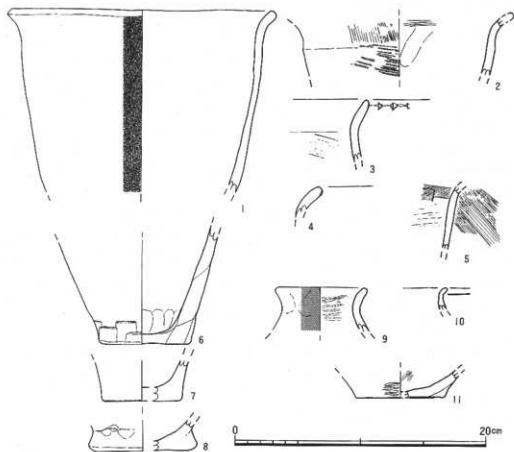
第9図 第Ⅲ層出土土器実測図 (1/3)

である。底厚はやや厚めに作られており、外面はタテハケ、内面はナデ調整で仕上げる。胎土には小砂粒が見られるが割合は精選されている。色は外面灰黒色、内面灰白色で焼成は良い。底径7.8cmを計る。4は杯下半で低くまるまった貼り付け高台をもつ。胎土は砂粒を含まない良質な粘土を使用し、色調は灰色、焼成はやや軟質の出来となっている。5は口径7.4cm、底径4.6cm、器高1.5cmで、胎土には砂粒を含まず、色調は茶褐色で、焼成は良い。6は全長6.0cm、最大径1.9cm、重さ24g。中心に円形孔が貫通している。胎土は精緻な粘土を使用しており赤褐色を呈す。

第Ⅳ層出土遺物（第10図・図版6）

1～8は甕である。1は口径を復元すると20.4cm前後で、口唇部は断面が隅丸の「コ」字状をなし、如意状になだらかに外反する口縁部からやや丸みをもって伸びる胴部にいたる。口縁と胴部の境には部分的には段がみられ、胴部表面は粘土接合時の押圧による凹凸が著しい。器表外面には煮沸に用いられたためか、有機物の吹きこぼれ痕と厚い煤の付着が認められた。口縁の内外面には丁寧なナデ調整がみられる。胎土は角閃石粒等を含む粗製粘土を使用しており、色調は灰黒褐色、焼成は良好である。2は胴上半部であるが口縁部を欠く。内穹ぎみに上方へ立ちあがる胴部から如意状に外反する口縁部に続くが、胴部と口縁部との境には明瞭な線をなす。胴外面にはヨコ方向の貝殻調整痕がみられ、口縁にはタテハケの後ヨコナデで仕上げる。内面にはナデ調整が施されているが口縁上半部にはヨコハケ痕が残る。胎土は白色小砂粒を含む良質の粘土を用いており、器表は淡明褐色を呈す。焼成は良い。3、4、5は小片であるため径の復元には至らなかった。3、4には口唇部には刻み目がみられ、内外面ともヨコナデ調整、5は外面に左斜め上方へのハケ、内面はヨコハケを施している。いずれも角閃石、長石粒を多く含む粗い粘土を用い、色調は順に淡明褐色、暗茶褐色、淡黒褐色を呈しており、焼成はいずれも軟質である。6～8は底部付近である。6は底径7.3cm、底部が平坦で胴部は直線的に上方へ伸びている。形成に際しては胴部を円筒状に作り上げた後に底の部分に粘土を充填していることが破損した断面より観察される。外面の調整は板状工具によるナデが行なわれたとみられる板擦痕が縦方向に走っており、底部付近に板木口による押さえが行なわれている。内面は器表剥落が著しいため調整は不明であるが、底部内面には粘土充填時の押圧痕がめぐる。胎土は小砂粒を多く含む粗製で色調は外面灰褐色、内面は黒灰色を呈し、焼成はやや軟質である。7も同様の形態を示すものであるが、器表の剥落が著しく詳細は明らかでない。復元底径は6.0cm。8は底上部が「く」字状に引き締まるもので、屈曲部には指押圧痕が残される。底径は8.6cm程になるとみられ、白色小砂粒を多く含む、色調は暗茶褐色、焼成は良いがやや軟質である。

9～11は壺片である。9は小形壺の口頸部で、口縁径は7.0cm程、頸上部から口縁部にかけて大きく「く」字状に外反し、口唇部は断面隅丸の「コ」字状におさめている。調整は磨耗のためはつきりしないが、内外面とも研磨調整を行ったようである。外面には丹が塗られている。胎土は雲母片、白色砂粒を含む良質の粘土を使用しており器表は淡明茶褐色、焼成も良い。10は口縁



第10図 第IV層出土土器実測図 (1/3)

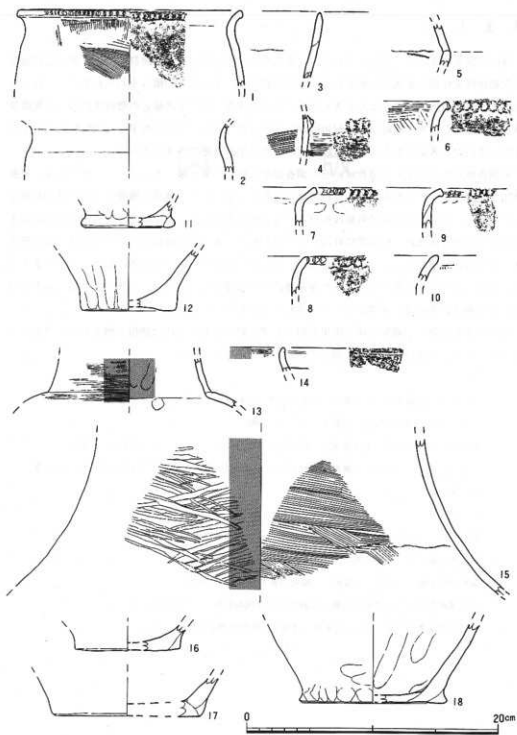
部であるが細片であるため径の復元は行っていない。小形壺になるものと思われる。弯曲しながら内傾する頸部は口縁部に至ると大きく外側に屈曲する口縁部は玉縁状に肥厚し、頸部との境に明瞭な段をなしており、口唇部は丸くおさめる。胎土は雲母片を多く含む精良な粘土を用い、色調は暗灰褐色で焼成も良い。11は底部片で、復元すると径は7.2cmになる。内外面とも研磨が施されており、胎土は白色小砂粒を多く含む。色調は黒褐色で、焼成も良好である。

第VI層出土土器 (第11図・図版6)

1~12は壺片である。1は復元口径17.4cmを測る中形甕である。ふくらみをもつ胴部が口縁部下で若干すぼまり、口縁は如意状に外反する。口唇部は断面隅丸「コ」字形で、端面に小ぶりの刻み目が施されている。胴外面はタテハケの後ヨコハケ調整で仕上げられており、口縁部下にはナデ消しがみられる。内面はナデが施されている。胎土には雲母片が多く含まれ、色調は暗茶褐色、焼成は良好である。2は口縁下部から胴部にかけての破片で、1と同様の形態的特徴をもつ。

外面はナデ、内面には板状擦痕が残り、外面と内面口縁部に煤の付着が観察された。胎土は白色小砂粒、雲母片を多く含み、色調は淡桃褐色、黒斑部をもつ。焼成は良好である。3～10は細片のため口径は不明である。3は胴部はまっすぐに上外方へ伸び、口唇部は丸くおさめており、外面には貝殻調整痕がみられる。胎土には石英、長石、角閃石粒を多く含む粗製の粘土を使っており、暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。4は肩部片で三角突帯に上向きの刻み目を施す。白色小砂粒を多く含む粘土で、色調は明茶褐色、焼成は良い。5も肩部片であり、口縁に向けて「く」字状に屈曲する。突帯等は設けられていない。屈曲部内面には接合痕の亀裂が走り、その下部には横方向の貝殻調整痕が残る。胎土には大粒の長石、石英粒を多く含み、色は暗茶褐色で焼成は良好である。外面の磨減が著しい。6～10はいずれも如意状に外反する口縁をもつものである。6～8はいずれも口唇部に刻み目を持つが、6・7・9は端面が押圧のために上下に肥厚しており、10は端面を丸くおさめる。6の内面には明瞭なハケ調整痕がみられる。いずれも胎土には長石、角閃石、石英粒を多く含む粗い粘土が用いられており、色調は順に、明茶褐色、淡黒褐色、暗茶褐色、淡茶褐色、暗茶褐色で、焼成は良いが、やや軟質である。11、12は底部片で、11は底径7.5cm程、底部上面が「く」字状にすぼまり、胴部は大きく外弯している。底は押圧により若干持ちあがる。胎土は白色砂粒を多く含み、色は明赤褐色～明茶褐色である。焼成はよい。12は復元底径7.4cm、底はやや上げ底で胴部は直上する底部から続いて外面へ内弯ぎみに伸びていくものと堆される。外面には指ナデ痕が残る。長石、石英粒と含有量が多い精良な粘土を用いた器表は暗赤褐色で、焼成も良い。他に図示しなかったが口縁下に数条の平行沈線めぐるした甕細片も出土していることを付記しておく。

13～18は壺である。13は中形壺の胴部から頸部にかけての破片で、その境には明瞭な段が付き、断面観察では接合痕がみられる。頸部は外反しながら内傾する。外面はヨコ研磨、内面はナデ調整を行い、外面と内面頸部には丹が塗布されている。14は口縁部小片で、内傾する頸上部から直上する口縁部に至り、口唇部は丸くおさめている。内面にはヘラ横研磨、丹塗りがみられ、外口縁部には一条の沈線が走る。ともに胎土には白色小砂粒を含む精良な粘土を用い、色調は淡桃褐色。焼成は良いが軟質。15は大形壺頸部で外反しながら大きく内傾するものである。外面は粗いヨコ研磨、丹塗りで内面には丁寧なヨコハケが施されており、一条の接合部亀裂が走る。胎土は角閃石粒を含む粗い粘土を用い、色調は淡赤褐色～淡茶褐色で、焼成は良好堅緻である。16～18は底部片で、16は底径が8.4cm程、底外縁が若干持ち上がる。端部の屈曲は鋭い。17は底径11.8cm程、端部は16程鋭くなくあまい。18は底径11.8cmを計り、端部が突出しており、軽く「く」字に屈曲した後、胴部は直線的に上外方へ伸びる。底厚は薄い。底周縁部には指押圧痕が残り、胴部には研磨が行なわれている。胎土はいずれも白色砂粒を含む良質の粘土を用い、色調は順に、暗茶褐色、明桃白色、淡桃褐色で焼成は良好である。



第11图 第VI层出土土器实测图(1/3)



a. 調査地点全景 (南から)



b. 自然河道近景・自然河道(前方)と溝 I(後方)(南から)



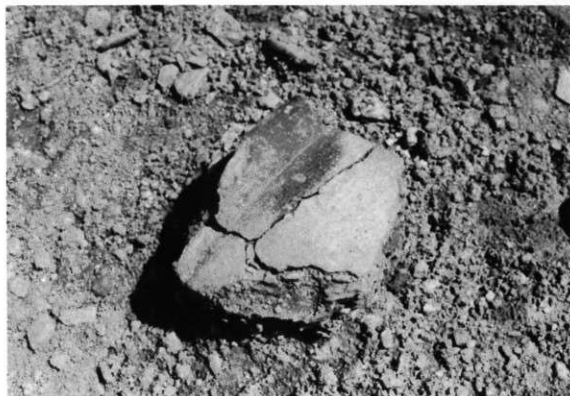
a. 調查地点基本層位



b. SD01溝層位(北壁)



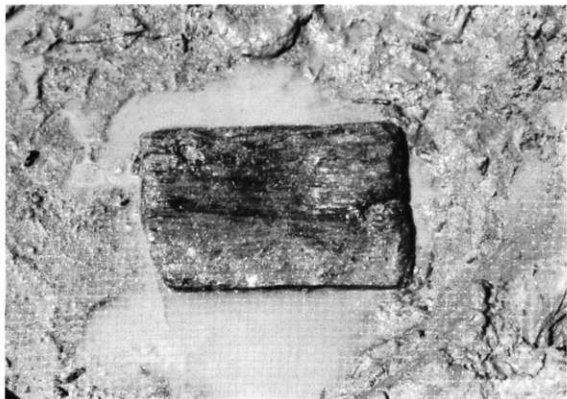
a. SD02溝 (北から)



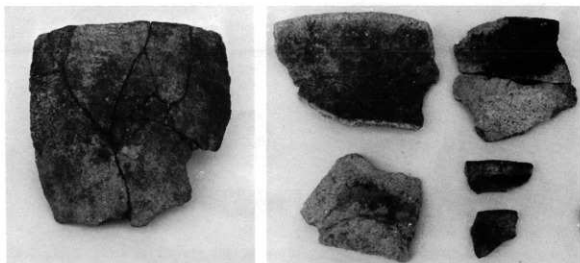
b. SD02溝土器出土状況



a. 自然河道土器出土状況



b. 同 木製品出土状況



溝 2 出土土器



(壺内面炭化物付着状況)

自然河道出土土器



遺物写真①



第III層出土土器



第IV層出土土器



第VI層出土土器



高田遺跡群第1次調査地点全体図 (1/100)

高田遺跡群

前原町文化財調査報告書

第 23 集

昭和 61 年 3 月 31 日

発行 前原町教育委員会
福岡県糸島郡前原町前原 623

印刷 青柳工業株式会社
福岡市中央区渡辺通 2 丁目 9 の 31
電話 092 (641) 1431

